

# 特集 [『法華經』とシルクロード]

論文

## ノルウェーのスコイエン・コレクションと 梵文法華經断簡の発見

松田和信

### 一 はじめに

今世紀初頭、英國のスタイヘ (M. A. Stein 1862-1943)、  
フランスのペリオ (P. Pelliot 1878-1945)、<sup>1)</sup> ルイ・グリュンヴェーデル (A. Grünwedel 1856-1935)<sup>2)</sup>、我が国の大  
谷探検隊を始めとする各国の探検隊は競つて中央アジア  
へ足を踏み入れ、シルクロードに点在する遺跡を発掘  
し、様々な言語で書かれた膨大な量の出土文献を持ち帰

つた。またこれらの探検隊とは別に、英國のパウアード大  
尉 (H. Bower 1858-1940)、英國のインド学者ヘルンレ  
(A. F. R. Hoernle 1841-1918)、ロシアのカシュガル駐在総  
領事ペトロフスキイ (N. F. Petrovskij 1837-1908) といつ  
た人々も、インドあるいは中央アジア赴任中に土地の人  
たちが持ち込んだ出土文献を買い集めた。そしてこれら  
の出土文献は、その後の仏教研究に大きな影響を与える  
ことになった。発見された資料のほとんどは断簡であつ

たが、既に失われたと思われていた数々の重要な文献の原  
典が、その姿を現したからである。

ところで、このような中央アジアにおける発見が現在  
に至るまで続いていたわけではない。一九三一年に現在  
のインド・パキスタン間の国境紛争地帯に位置するギル  
ギットの仏塔跡から発掘された約三千葉の樺皮写本（一部  
の紙写本を含む）いわゆる「ギルギット写本」の発見を  
最後に、探検ブームが去り、あるいは戦争がもたらした

世界情勢の変化等により、その後例外的に少数の写本發  
見の報告はあったが、大規模な写本發見は今後もはや望  
むべくもないものと思われていた。

しかし、この数年の間に状況は劇的に変化した。旧ソ  
ビエトのアフガニスタン介入と、それに続いて現在にま  
で至る不幸なアフガン内戦は、現地の荒廃と引き換え  
に、世界の古写本マーケットに膨大なアフガニスタン出  
土文献の流入という皮肉な結果をもたらしたのである。  
マーケットに現れた写本類の大部分は最終的にヨーロッ  
パの研究機関あるいはコレクターに引き取られて行つた  
(あるいは行きつた)。その中で、すでに我が国でも、

百点に上るバクトリア語写本がロンドン大学のシムズ＝  
ウイリアムズ教授によつて報告されている<sup>(1)</sup>が、筆者のよ  
うな仏教研究に携わる者にとって注目すべきは、最近話  
題を呼んでいる大英図書館 (British Library) の入手した  
カローシュティーリー樺皮巻物、さらに筆者も調査研究に参  
加しているノルウェーのスコイエン・コレクションに含  
まれる仏教写本類である。

### 二 大英図書館のカローシュティーリー樺皮巻物

一九九六年の六月、ロンドンの大英図書館は記者発表  
を行い、同館が匿名のスポンサーの資金援助で入手し  
た、アフガニスタンのハッダ遺跡から出土したという素焼き  
の壺五個と、その中のひとつに入っていた写本を公表し  
た。写本は白樺の樹皮 (樺皮) で作られた巻物で、カ  
ローシュティーリー文字によつてガンダーラ語の仏典が書写  
され、全体で十三巻よりもなる。驚くべきことに、これら  
巻物の書写年代は一世紀に亘り、知られている中では、  
死海文書にも比すべき世界最古の仏教写本だという。記  
者発表の時点では、これらの巻物はすでに同館の保存部

いたのとほぼ同じ頃、ロンドンの古書籍商サム・フォッグのアジア関係の写本を網羅したカタログ第十七号『ヒマラヤとインド亜大陸の写本』が届けられる。その中には一〇八葉よりなる仏教写本の断簡が掲載されていた。<sup>(6)</sup> それらはインド系グプタ文字およびギルギット・バーミヤン文字で書かれた仏教写本の断簡で、すべてアフガニスタンから出土したものであった。スコイエン氏はこれを購入し（価格は当時のレートで約一、二〇〇万円であった）、その後ヨーロッパの古書マーケットに現れたほぼすべての写本を買い集める。

一九九七年の一月、スコイエン氏の写本蒐集のニュースを知った筆者は、オスロ大学のイェンス・プロールヴィック (Jens Brarvig) 教授、同じオスロ大学のフォン・ジムソン (Georg von Simson) 教授、ベルリン・フンボルト大学のイェンス＝ウヴェ・ハルトマン (Jens-Uwe Hartmann) 教授（今年の秋学期よりミュンヘン大学に転出予定）、ベルリン・インド博物館学芸員のローレ・サンダー (Loe Sander) 博士（現在は博物館を定年退職）の五人でグループを組み、プロールヴィック教授を代表者と

か回収できないような微少破片を多く含んでの数である。大雑把なことしか言えないが、それらの全文字量から推定すれば、ベルリンにあるドイツ探検隊蒐集のトルファン写本コレクションには遠く及ばないであろうが、筆者もその全体を閲覧した経験をもつ大英図書館のスタイン・ヘルンレ・コレクションより多いのではないかとの印象を持つ<sup>(7)</sup>。

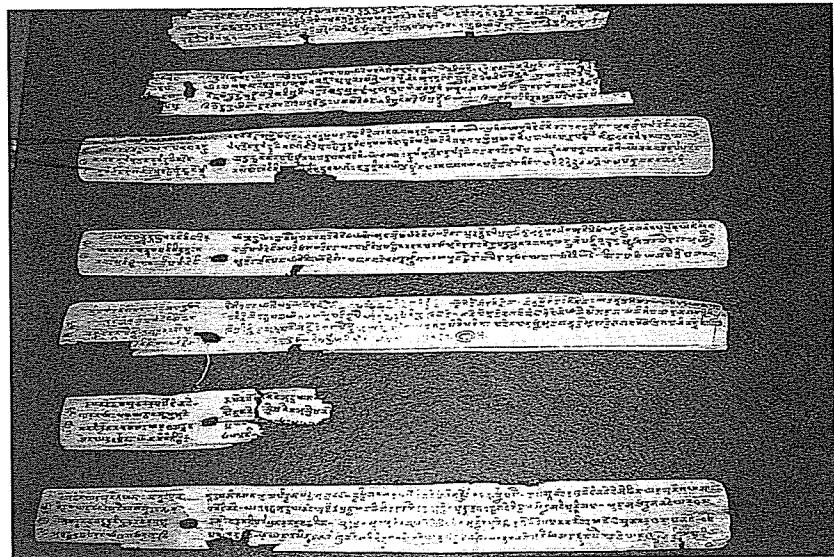
一九九七年十一月の調査は一週間にわたって行われたが、その間、我々はオスロよりスコイエン氏の山荘に通い、すべての写本断簡をメンバーの一人であるインド古文書学の専門家サンダー博士が構築した書体の編年に従つて分類し、ファイリングする作業を行つた。その大枠の書体別分類は、カローシュティー文字、クシヤーナ文字、北東型グプタ文字、北西型グプタ文字、ギルギット・バーミヤン第一型文字、同第二型文字（我が国に伝えられた悉曇文字に同じ）の六種である。写本の材質は貝葉（ターラ椰子の葉）、樺皮（白樺の樹皮）、動物の皮の三種で、紙写本は一葉もない。動物の皮に書かれた仏教写本というのは極めて珍しい。筆者が実見したのもこれが

してスコイエン氏と交渉した結果、幸いにもすべての写本の研究と出版の許可をスコイエン氏より獲得し、五人のそれぞれがスコイエン氏と文書により取り決めを交わした。

許可を受けた我々のグループは、さうそく一九九七年十一月、および一九九八年の十一月の二度スピッケスタッド郊外のスコイエン氏の山荘を訪れ、現地調査を行つた。そこで目にした仏教写本は、紀元一世紀に遡るかもしれないカローシュティー文字写本断簡から、七、八世纪のギルギット・バーミヤン書体の写本に至るまで、まるで数世紀に亘るインド文字資料のすべてがそこにあるといつても過言ではなかつた。我々が最初に訪ねた一九九七年十一月の時点では総数は約六千断簡、一年後の昨年十一月の時点でも一万断簡に膨らみ、恐らく本稿を書いている現時点でも膨張を続けているはずである。ただし、この数はあくまでスコイエン氏の言う総数であり、我々が実際に数えたわけではない。注意しておきたいのは、全体の約四分の三ほどは数センチメートル四角の小さな断簡である。しかも一万点という数は、文字が一文字し

最初であつた。

複数のディーラーが等しく伝えるところによると、これらの大写本の大部分はアフガニスタンのバーミヤン渓谷のとある洞窟からもたらされたものらしい。ただし正確な場所は不明。それは自然の洞窟で、入り口はひとつ、内部は三本の洞窟に別れ、その中のひとつの中まつた所に仏像が安置され、その仏像の周辺に大量の写本が散乱していたという。そして土地の人から複数の業者の手を経てヨーロッパ市場に流れ込んで来たという。ただしこれはあくまでスコイエン氏購入写本の相当部分の由来であつて、我々の見るところ、特にさしたる根拠があるわけではないが、アフガニスタンの他の地域、あるいはギルギット等のパキスタン域で発見された写本も含まれているように思われる。出土地がはつきりしないのは残念なことではあるが、今はとにかくこのような膨大な古写本が戦乱のアフガニスタンから回収されたことだけでも幸いとせねばならないのかもしれない。特に、今まで知られている世界各地の中央アジア写本コレクションに比べて、スコイエン氏のコレクションの持つ重要性は、こ



整理中の勝鬘經、阿闍世王經、諸法無行經の貝葉写本（1997年11月）

これが直接的なインド文化圏（ガンダーラ）より現れた、初めての大規模な仏教写本コレクションだという点である。

無論、同じようなものにギルギット写本があるが、こちらにはそれよりはるかに古い時代の写本が数多く含まれている。驚くべきことにカローシュティー貝葉断簡も二百近く見出されている。これまで知られているカローシュティー資料は樺皮か木簡であつて、貝葉写本の発見は世界初である。

最初の調査の後、スコイエン氏自身の手で、すべての写本の複写がオスロとベルリンおよび筆者用に三セツト作成されることになった。そして筆者分は約束通り昨年四月以降プロールヴィック教授を経由して届きつつあつたが、修復に出されているものを除いて、昨年十一月の二度目の調査の際に、残りを受け取つた。これらはすべてスコイエン氏の山荘にあるキャノンのデジタル・カラーレ複写機で直接撮られたものである。将来の色褪せがいさざか心配ではあるが、美しい原寸大コピーで作業しやすい。

#### 四 発見された文献

二度の現地調査、および受け取った写本のカラー複写を通して、我々は現在徐々にスコイエン・コレクションの解説と文献の同定を進めつつある。現時点で判明している文献を古い順に記せば、まずカローシュティー貝葉写本中に見出されたガンダーラ語の小乗『大般涅槃經』(*Mahāparinirvāṇasūtra*) の断簡数葉がある。これはカローシュティー写本の解説と出版を担当して我々に助力していただけたことになったサロモン教授による比定である。サロモン教授が我々に示されたローマ字転写テキストから判断すれば、その中には同經に組み込まれた『大善見王經』(*Mahāsudarśanasaṃskṛita*) の末尾に相当する断簡が含まれるが、現存する『大般涅槃經』のパーリ語、梵文、漢訳バージョンとは一致しない。最も近いのは、法藏部所属とされる漢訳『長阿含』に含まれる『遊行經』のその部分であるが、それでも一致するのは半分程度か。恐らく別な教団の伝える別ヴァージョンなのである。サロモン教授に直接伺つたところでは、ここに現

れるガンダーラ語は純粹なものではなく、その語形に梵語の影響を強く残している。恐らく年代的には大英図書館の卷物より新しいものであろうとのことである。

次に、ザンダー博士とプロールヴィック教授がクシヤーナ文字貝葉写本の中に『八千頌般若經』(小品般若)の断簡約四十葉を見い出した。ザンダー博士の編年では、一世紀前半に遡る写本である。言語は仏教梵語の一種であるが、その中でも『大事』(*Mahāvastu*) に用いられたような俗語で書かれている。例えば *evam ukte* が *evam vutte* などと表されている。一世紀前半といえば『般若經』の成立とそう離れていないのである。これは当時の『般若經』が最初から完全な梵語で成立したのではなく、それに先だって相当崩れた俗語の『般若經』がインドに存在していた直接の証拠が現れたのである。少なくとも、これは現存最古の大乗經典の写本であり、何とそれが完璧なクシヤーナ文字で書かれているのである。

次に、筆者は『勝鬘經』(*Srimuladevisiṃphanañavideśasūtra*) の完全な貝葉写本三葉を含む数葉を、ハルトマ

ン教授はこれと同じ写本セットに含まれる『阿闍世王經

(*Ajatasatruakubhyavivinodanastava*) の断簡二十葉以上を見

出した。またこの写本セットには『諸法無行經

(*Sarvadharmaaprayavritistava*) の断簡も多く含まれることが

確認されている。いずれもこれまで他文献における引

用を除いて原典の知られていないかつた重要文献である。

北西型グプタ文字で書かれ、四世紀前半の写本であると

いう。事実とすると、こちらも驚くべき年代の写本である。

いすれも基本的には梵語で書かれているが、動詞の

崩れ方はひどい。アオリリストと現在形が混合したような

語形が多く見られる。

コレクションに含まれる最も新しい年代の写本は、ギルギット・バーミヤン第一、第二型書体で書写された写本であるが、第一型書体で書かれた樺皮写本の中に、因縁物語付きの『法句經』の断簡数点を見出した。漢訳と比べてみたが『法句譬喻經』等とは一致しない。どうやら新たなヴァージョンの因縁物語付『法句經』のようである。etasmīn vastusmīなど、いつ独特の表現が見られる」とからすると、大衆部 (*Mahasanghika*) の『法句

經』の可能性が考えられるかもしない。

なお、コレクションには二点だけバクトリア語の皮革写本断簡が含まれている。その解読はシムズ・ウイリアムズ教授に依頼しているが、教授の暫定的解読テキストを見た限りでは、これは間違いなく仏教文献、しかも大乗文献である。興味深いことに、そこには種々のブッダの名称が列挙されているが、それらの名称は『無量寿經』あるいは『法華經』に現れる種々のブッダ名と共通しているのである。

さらに確認された文献の名前だけ掲げておくと、『月上女經』『宝星陀羅尼經』『摩訶僧祇律』『四百讚』『ジヤータカ・マーラー』『アシヨーカ・アヴァダーナ』『チヤンギー經 (Cangastava)』、その他梵文阿含・律断簡などがあり、そして勿論『法華經』の断簡もある。なおアビダルマ関係の断簡が数多く見出されているが、現時点では一葉も同定されていない。『チヤンギー經』とは、パリー中部經典の第九十五經 (*Cankitsutta, MN 95*) に対応するものであるが、漢訳阿含には見出されない經典である。あまり類例のない北東型グプタ文字で貝葉に書写

され、ほぼ完全な数葉を含む複数の断簡が回収されている。この經典は、*dharmanidhyānakṣanti* といふ、唯識文献を読む者にはよく知られた重要用語の現れる經典であるが、この語は断簡中にも数度確認できる。我々のグループの中では現在この『チヤンギー經』の断簡が、大衆部の長阿含もしくは中阿含の一部ではないかとの議論が続いている。

以上、(i)で言及した写本断簡は、スコイエン・コレクション全体から見れば、ほんの数パーセントにすぎない。大英図書館の巻物同様、こちらの解讀研究も今始まつたばかりなのである。

## 五 法華經断簡の発見

スコイエン・コレクションに『法華經 (Saddharma-pundarikasatra)』の断簡が含まれていることが判明したのは、ほんの数ヶ月前のことである。それは筆者およびハルトマン教授を手伝つてグループに参加しているゲッティンゲン大学のクラウス・ヴィラー (Klaus Wille) 博士によつて発見された。現時点で判明しているのは、わ

ずか七つの断簡にすぎないが、この数は今後増える可能性は大きい。七つの断簡のうち、ひとつは断簡 (我々の整理番号では MS 2381-40) は、ギルギット・バーミヤン第一型書体で書写された、『法華經』第三章に対応箇所を持つ樺皮写本の小さな断片にすぎないが、残りの六つは貝葉写本の断簡である。六つの断簡のうち、二断簡 (MS 2381-2, MS 2382-271) は『法華經』第三章に、残りの四断簡 (MS 2381-1a, -1b, -20, 82) は第二十一章に対応箇所を持つ。

これら六つの断簡は、いすれも五行という行数、そして内容と書体等から判断して同一写本に属することは間違いない。書体は、基本的にはギルギット・バーミヤン第一型書体ではあるが、ギルギット写本の『法華經』に用いらされたものと完全な同一書体ではない。例えばギルギット写本の “s” は “s” 類似しているが、この断簡に現れる “s” は、インド型グプタ文字の形を保持しており、間違つことはない。恐らく時代的には、典型的なギルギット・バーミヤン第一型書体に先立つものであろう。完全に保存された貝葉が現時点では回収されて

ではやのサンプルとして、六つの断簡の中から『法華経』第三章に対応する一葉 (MS 2382-271) の表面のみのローマ字転写を示しておるので参考にして頂きたい。これは「ケルン・南条本」の七十六頁(二行田から七十七頁)二行田に相当する。なお両端が破損しているため頁数は不明である。

1 // .kumārakāḥ sarve cintayitavyā na viṣamam  
aham api (ba)hukosakoṣṭhāgāraḥ sarvasatvānām apy  
aham imāny evamṛūpaḥ [ma] //

2 // (hai)va tasya puruṣasya mṛṣāvādadoṣaḥ syāt \*  
yena teṣāṁ dā(rak)nāṁ pūrvam triṇi yānāny  
upadarśayitvā paścāt sarveṣāṁ eva mahāyā //

3 // dī bhavet \* yat tena puruṣeṇo pāyakausalyena te  
kumārakāḥ tasmād ādīptā gṛhā niṣkāsita  
jīvitenačchāditā tat kasya hetoh [a] //

4 // na da[dyāl]t tathāpi tāvad bhagavan sa puruṣo  
na mṛṣāvādi syāt \* tat kasya hetoh tathā hi bhagava..  
tena puruṣena pūrvam evaitad al[nu] //

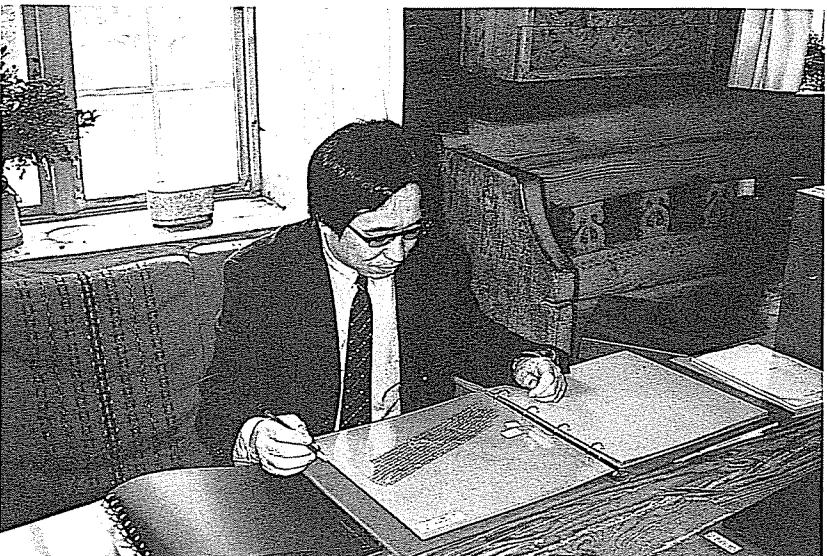
5 // [na mṛṣāvāda] bhavati / kaḥ punar vādo 'nyena

puruṣena prabhūtaṇ.. [ko]jśakōṣṭhāgāraḥ astīti kṛtvā  
putrapriyatām eva manyaṁānena //

## 六 種々の関連情報

次にこの機会を借りて、スコイエン・コレクションに関する、あるいはそれに関連するアフガニスタン・パキスタン出土写本についての一年ばかりの間に筆者の許に届いた雑多な情報をアトランダムに記しておくことにした。

(1)スコイエン・コレクションに対する我々の研究は、プロールヴィック教授の尽力で、オスロ大学とノルウェー学術会議からの予算も下りるところとなり、ノルウェーでは正規の研究プロジェクトとなつた。それにメンバーの属する各研究機関の正規のプロジェクトとされるのが望まれるので、筆者も新年度より、勤務する大学研究所においてこれを研究課題として取り上げることにした。その際には、我々五人ではカヴァーしきれない写本について、我が国の研究者にも研究を分担していただき予定である。



スコイエン氏の山荘で調査中の筆者 (1998年11月)

筆者は他のメンバーの許可を得て、これらの断簡の複写の複写を『法華経』写本研究の世界的権威、徳島大学の戸田宏文教授にお渡ししたが、教授からの私信によるところには他のどの写本にも見られない独自の読みが含まれ、独立した系統の写本らしいことである。我々のグループ五人は、近い将来に、これらの『法華経』断簡が戸田教授の手で解説され、公表される」とを願っている。ここで述べているように、現時点での発見されている『法華経』の断簡はギルギット・バーミヤン第一型書体のものに限られ、それより古い純粹なグプタ文字で写された写本は残念ながら未だ見い出されていない。しかし断簡の数は膨大である。我々の役目は、戸田教授にお渡しできる断簡の数を一枚でも多くする」とだと考えていい。

さて完全な研究と出版は戸田教授に託すとして、つい

いないため、そのサイズは想像するしかないが、恐らく縦三センチないし三・五センチメートル、横四十五センチメートルほどの横長の、さほど大きくなないサイズの貝葉であったと思われる。

(2)我々のグループによる写本研究の成果は『スコイエン・コレクションの仏教写本 (The Buddhist Manuscripts in the Schøyen Collection)』と題して、その第一巻が一年以内にオスロで出版される予定である。筆者はその中で『勝鬘經』の断簡を担当する。なお、その先駆けとしてハルトマン教授が『阿闍世王經』の断簡一葉をカンタベリー大学(ニュージーランド)のポール・ハリソン(Paul Harrison)教授と共に出版したばかりであるのでは非参照していただきたい。<sup>(8)</sup> なお本稿に先立つて、筆者もスコイエン・コレクションについての三つのレポートを公表している。

(3)米国東洋学会の西部地区大会が昨年の十月三十日から二日間、シアトルのワシントン大学で開かれ、リチャード・サロモン教授らによるカローシュティー写本研究のパネルが開かれた。筆者も聴講に行つたが、パネルは“Buddhist Texts in Transit and Transition: Sanskrit, Pāli, Gāndhārī and Chinese”<sup>(9)</sup>と題され、十名の研究者が発表と討論を行つた。サロモン教授自身は“Newly Discovered Fragments of a Gāndhārī Version of

した十数葉づつの三つの束に別れ、全部で五十葉ほどはあつたと思う。全部を剥がして保存修理するのが不可能な状態ではなかつた。書体はギルギット・バーミヤン第一型。数枚の写真を撮つた後、しばらく時間をかけて読んでみると、その中に『典尊經 (Mahāgovindasutta)』が確認できた。帰国後、筆者の撮影した写真の中には、ゲツティングンのヴィレー博士によつて『幻網經 (Mayajalastatra)』等も確認された。これは紛れもなく説一切有部系梵文『長阿含』を記した樺皮写本の束である。

(6)上記のようにロンドンで『長阿含』写本の束を見て帰国した一ヶ月後、『大法輪』誌の本年一月号に定方晟教授による新たな報告が掲載された。<sup>(10)</sup> それは再び日仏交易社の栗田功氏がパキスタンから入手した新たな写本の束の最上面のみを写した一枚の写真を用いて、そこに写っている写本を教授が独自に『典尊經』に同定し、ローマ字転写と和訳を示したものであった。筆者はこれを定方教授から直接いただが、それを見て驚いた。それは筆者が一ヶ月前ロンドンのサム・フォッグで見た写

the Mahāparinirvāṇa-sūtra”と題して、上記スコイエン・コレクションに見出された『大般涅槃經』のカローシュティー貝葉写本断簡についての研究発表を行つた。

(4)一九九七年の秋にカローシュティー樺皮巻物が詰まつた壺が再びロンドンのマーケットに現れた。巻物の量は大英図書館のものより多かつたらしい。しかもその壺の銘文には年号が記されていたとのことである。これらはイングランド西部に住む蒐集家によつて購入され、大英図書館に修復のため持ち込まれた。あまりにも巻物の状況がひどく、また図書館の「東洋・インド省コレクション部」が引っ越し作業で忙殺されていたため、壺と巻物はいつたん購入者に返された。その後どうなつたかは不明。

(5)昨年十一月の二度目の調査の帰途ロンドンに立ち寄り、スコイエン氏に写本を仲介したディーラーの一人サム・フォッグを筆者は訪ねた。数日前に届いた写本があるといつて見せてもらつたが、縦十七センチ、横六十七センチメートルほどの大きな樺皮写本の束であった。癒着

じく法藏部の名が記されてゐる。中には焼けこげてチヨコレート状になつた写本が数点入つてゐた。

身が密かに楽しんだらいいのだから。

(8) 先月の初めに、またまた栗田功氏の写真を用ひて定方晟教授が報告を出された。<sup>(11)</sup> 今度はギルギット・バーミヤン第一型書体で書写された『一万八千頃般若』の樺皮写本の束についてである。これはすでに現物が栗田氏によつて入手されたとのことである。この樺皮写本の束とは別に、本人に確認してこないため、(11)では名前を出せないが、似た写本の束を購入した日本人もいると聞く。ある所で見たその一部写真による、栗田氏の『一万八千頃般若』の泣き別れのように見えた。

以上のような世界の現状を何と形容したらよいかある。もしかして筆者が追跡しきれてくるのも、世界のマーケットに出回つてゐる写本のほんの一部にすぎないのかもしれない。スコイエン氏の入手する写本は我々が責任を持つとして、今後続々と現れるかもしないものはどうなるのか。それらが蒐集家の許に秘蔵される、となるべく、研究者に解放される、ことを願つてやまない。我々に現物は不要である。写真で十分である。現物は蒐集家自

(11) 先月の初めに、またまた栗田功氏の写真を用ひて定方晟教授が報告を出された。今度はギルギット・バーミヤン第一型書体で書写された『一万八千頃般若』の樺皮写本の束についてである。これはすでに現物が栗田氏によつて入手されたとのことである。この樺皮写本の束とは別に、本人に確認してこないため、(11)では名前を出せないが、似た写本の束を購入した日本人もいると聞く。ある所で見たその一部写真による、栗田氏の『一万八千頃般若』の泣き別れのように見えた。

註

(1) ニコラス・シムズ＝ウイリアムズ「古代アフガニスタンにおける新発見—ヒンドゥークシ山北部出土のパクトリア語文書を中心として」『ORIENTE—古代オリエント博物館情報誌』十(1997) (一九九七) 二二一—二二七頁。

(2) "British Library acquires oldest Buddhist manuscripts known", *The Japan Times*, June 28, 1996. 売り價額なし。その後、大英図書館自身が発行する「ペニタードのサドールが誰か」と題する冊子を購入した。

(3) Richard Salomon, "A Preliminary Survey of Some Early Buddhist Manuscripts Recently Acquired by British Library", *Journal of the American Oriental Society*, Vol. 117-2 (April/June 1997), pp. 353-358.

(4) 定方晟「西北インダの法藏部」『春秋』一九九六年一〇月号、二二一—二三二頁。その後、定方教授は同内容を「ラテン語による論文中に発表してゐる。A. Sadakata, "Inscriptions Kharosthi provenant du marché aux Antiquités de Peshawar", *Journal Asiatique*, Tome 284 (1996 Numéro 2), pp. 301-324.

(5) (1) の放映を元にした出版が『アッタ大いなる旅路

(1)

*Suryacandrika... Essays in Honour of Akira Yuyama on the Occasion of His 65th Birthday... (Indica et Tibetica 35)*, Swisttal-Odendorf, 1998, pp. 67-86.

(6) 「トトガリスターからノルウェーへ」『佛教大学総合研究所報』十三号、一九九七年十一月、二四四—二五八頁。「ノルウェーに現れたアフガニスタン出土仏教写本——マーティン・スコイエン氏のコレクションを訪ねて」『用申しにか』一九九八年七月号、八十二—一八十八頁。「シアル、そして再びオスロとロンダムヘー」『佛教大学総合研究所報』十五号、一九九八年十一月、十四—十六頁。

(7) 定方晟「ギルギット写本——『典誥經』断片の解説」『大法經』一九九九年一月号、二二〇—二二五頁。写真は同説の口絵に掲載してある(十八—十九頁)。

(8) 定方晟「ギルギット写本・一万八千頃般若經」『春秋』一九九九年一月号併記、二二一—二二二十四頁。

(1) 一九九九年四月五日

(4) かずのぶ／佛教大学教授

(9) スコイエン氏は自身のコレクション写本の項ではサンブルのカラー写真とともに、その総数を四〇〇葉と二二〇〇の断片と記している。写本の総数がその後も劇的に増えてしまったのである。なお、カタログは数十部出版されたのみで、日本では入手不可能。

(10) Jens-Uwe Hartman and Paul Harrison, "A Sanskrit Fragment of the Ajatasatrukaukyta-vinodana-sutra",